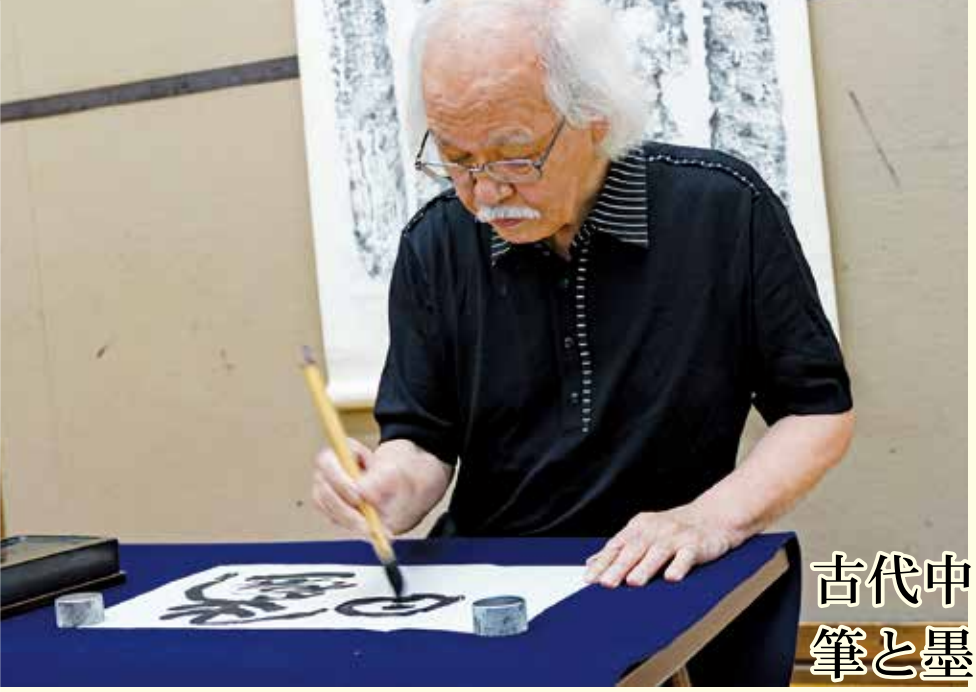

題字：牛窪梧十氏

古代中国に思いを馳せ 筆と墨で織り成す至極の作品

牛窪 梧十さん

プロフィール
狭山市在住の書家。1982年謙慎展西川春洞先生記念賞、1996年日展特選、2019年日展文部科学大臣賞など数々の賞を受賞。2022年、芸術の分野で顕著な功績があった人に贈られる日本芸術院賞・恩賜賞を受賞。

卓越した芸術作品と認められるものを制作した方に授与される日本芸術院賞と、その中から特に選ばれて贈られる恩賜賞を市内在住の書家、牛窪梧十さんが受賞しました。日本芸術院賞のかつての受賞者には川端康成や高村光太郎などが名を連ねます。今回は、栄誉ある賞を受賞した、牛窪さんをご紹介します。

初めて筆を手にしたのは、小学1年生の時でした。当時は単なる習い事の一つに過ぎなかったといいます。その後、高校入学とともに、書道部へ入部。

「部活に何も入っていないと運動部へ入部させられるところだったので、少し経験のある書道を選びました。その時は、書に打ち込むなんて夢にも思ってなかったですよ」

高校1年生の夏休みが終わったころ、1冊の本と運命的な出合いをします。牛窪さんが後に師事することとなる西川寧先生著の『書の変相』です。

「書がいかに奥深いものか、この本から学びました。また、著者に教えを請いたいという思いも芽生えてきましたね」

それから1年後、書で生きていく決意をします。高校の先輩の影響から書道の教師を志し、西川先生が教壇に立つ、東京教育大学を目指しました。晴れて志望する大学に合格すると、西川先生に師事し、一層本格的に書を学ぶようになりました。

受賞した書『陸游詩』

大学卒業後は、母校の高校で教師と書家、二足の草鞋の道をスタートさせます。

「この生活に本の執筆が加わった時が一番大変でした。睡眠時間は一日3時間程でしたね。ただ、高校の書道の授業で使うための本を書いていたので、世の中の書を学ぶ学生のためになればという思いで制作にあたりました」

刊行された『標準篆刻篆書字典』は、発売後すぐに全国の高校にも導入されました。

書家としての活動を続けるうちに弟子も増え、自己研鑽に充てる時間が少なくなってきたことから1993年、25年の高校教員生活に終止符を打ちました。

退職後は、これまで以上のペースでの執筆活動や、パソコン用の篆書フォントを揮毫するなどして、本格的に書家としての活動を開始します。また、作品の制作も精力的に行い、日展特選や文部科学大臣賞など、数々の賞を受賞しました。

そして、2022年に集大成ともいえる、日本芸術院賞・恩賜賞を受賞。受賞作の『陸游詩』は、13世紀の詩人・陸游の漢詩を、約3千年前に中国の青銅器に書かれた文字、「金文」の書体で書いたものです。6月に行われた授賞式後のご鑑賞では、天皇皇后両陛下に作品の説明をし、「とても力強いですね」とお言葉をいただいた、とのことでした。

「これからがもっと忙しくなるんですよ」と笑いながら語る牛窪さん。今後、その筆からどのような作品が生み出されていくのでしょうか。

賞状
牛窪梧十殿
日本芸術院は
恩賜賞として
賜品を贈ります
令和四年六月二十日
日本芸術院長 高階秀爾
第一五一号

日本芸術院恩賜賞の賞状